

2、楯干しで親しまれてきた御殿場（御殿場）

米津のそばの御殿場海岸は現在でも楯干しで市民に広く親しまれていますが。楯干しのはじまりについてはよくわかっていませんが、第二代藩主藤堂高次あたりからのことではないでしょうか。三代高



御殿場海岸

久のころからは「立干」や「建干」の名でしかんに記録にも出てきます。

楯干しは、遠浅の海岸にさおを立てならべて網をはり、潮が引いてからはね回る魚を手づかみにする豪快なもので、二度でも経験したものは男女を問わず、その楽しさが忘れられないといえます。

昔は御殿場付近の砂の州がくちばしのように出ていましたが、米津付近はま

だ海の底で、藤方村の近くまで大きく入海になっていました。それが干拓され

て新田地となり、寛文一〇（二七〇）年初めて人家が集まり米州村（米津）が誕生しました。

そのころの古地図にも、砂の州の御林の中に「御殿所」の字が書かれていま

すから、ここに藩主の休小屋が建てられていたことがわかります。

江戸後期には御殿場の名で広く親しまれ、ススキ・コチ・キス・ボラなどが

主な獲物であったようです。

阿漕浦から御殿場までの海岸松並木は「白砂青松の津海岸」の名を高めたも

のですが、これは昔からの多くの人々の努力によるものです。

とりわけ、第九代藩主高嶺のころ、藩の幕僚役人であった外山与惣右衛門

（方道）が寛政五（一七九三）年より約一〇年を費して、六五万本もの苗木を植え加えて献身的に世話をしました。いくら枯れ損

3、水のきれいな津の海水浴場

津の海は、県立公園に指定され、謡曲「阿漕」で知られた阿漕浦をはじめ、一二キロにわたる白砂青松の海浜をもっています。東には、はるか三河・尾張の山々が絵のようにかすみ、南には、淡く浮ぶ志摩・渥美の半島の間に太平洋の黒潮をのぞみ、水も清く波静かで遠浅の理想的な海水浴場です。有名な水泳術観海流もこのような津の海で生まれたものです。

また津の海は遠浅のため、干潮時には広い砂浜で、いろいろな遊びができますが、なかでも潮干狩りや引き網、また藤堂藩主が自ら奨励したという楯干しなど有名です。さらに海浜の松林は、キャンプの好適地で、御殿場浜には国民宿舎も建てられています。

4、観海流 海を観ること陸の如き水泳術の発祥地

泗水術観海流を創始した宮発太郎信徳は、その秘伝に「攻其無備出其不意」と書いています。無備を攻めて不意に出ることは武道の極意であり、観海流も武道の一つとしての泗水術（泗とは泳ぐこと）でありました。

宮発太郎は武州忍藩（埼玉県行田市）の医師の子として生まれましたが、海防論者であった父の感化をうけ、早くから海に関心をしめし、水泳術の修行のため各地を巡り、とくに、いわゆる紀州三派（能島派、岩倉派、小池派）の水泳術で有名な紀州藩では、能島派の修業をつみました。

しかし彼は能島派の泳法があまり実用的でないのにあきたらず、苦心の結果、ついに独自の泳法をあみだしました。それは老人の腰をまげて杖をつく姿から、ヒントを得たものといわれ、蛙脚の平泳ぎで水面に波しぶきを立てず、いつまでも静かに